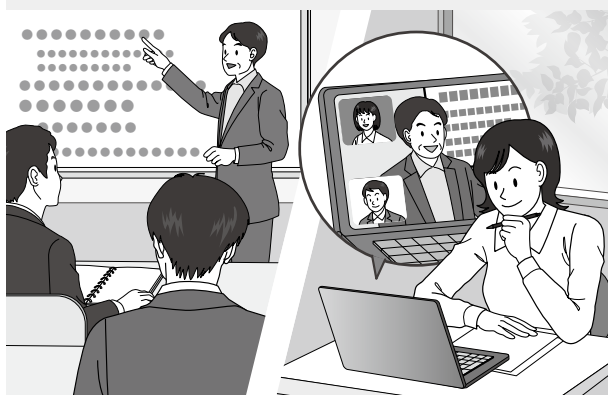


連載

進学塾に学ぶ ハイブリッド な教え方



第3回

【リアルな研修】 教材の効果的な活用方法

市進ホールディングス
コンサルティング事業研究所 所長

細谷幸裕



ほそや ゆきひろ

1996年、株式会社市進入社。現場を経て、2005年より同社教育本部教務統括室にて講師養成に携わる。2008年からは全国教育委員会・私学での教員研修の講師を務めるようになり、現在は企業・官公庁を中心に、「社内講師養成」、「OJTトレーナーのコーチング」、「説明力強化」などの研修・コンサルティングを行っている。

今回は、発問には品質（クオリティ）があり、その聞き方ひとつで学習者に知識を問うのか、または考え方を問うのかなど、レベルをコントロールできるということをお伝えしました。今回は、その発問の素材となる教材の使い方についてみていきます。

「教材を教える」の誤解

塾や予備校では、生徒に知識を教えるときに、教科書や指定されたテキストを使用します。教材の効果的な使い方は、塾の講師が講義でよく取り入れている手法ですが、企業内の研修では意外と知られていないように思います。

たとえば、皆さんが講師として研修に登壇するとして、そこで既存のテキストを活用する場面を考えてみましょう。研修テキストの内容を受講者に教えるときに、どのような工夫をされているでしょうか。

よくあるケースは、テキストに書いてある内容を講師が読み上げ、「ここが重要だから線を引いてください」と重要箇所の指摘に使う場合でしょう。あるいは、講師が読み上げるだけでは受講者が飽きてしまうからと、受講者のだれかを指名して代わりに読んでもらうという対応をとるケースもあるかもしれません。または、せっかくテキストが用意されているのに、このテキストはあまりよくないからと決めつけてしまい、講師自身が自分でレジュメや穴埋めプリントを作って講義をする場面も見受けられます。

これらのすべてが悪いわけではありませんが、ひとついえることは、一流の講師はどんな教材であっても「受講者に学習させる教え方」ができるということです。

では、学習させる教え方とは何かといえば、講師がテキストの内容に強弱・軽重をつけるなどといった「伝達すること」に重点を置くのではなく、受講者自らが分析をし、理解を促進するといったものになります。教え方の上手な講師は、じつはそれだけでなく、学ばせ方も上手であり、とくに教材の扱い方でその差がはっきりと表れます。

つまり、上手な講師は教材を使うときに、講師が全部を解説しようとは思っていないのです。それは、教材の内容を講師が全部解説してしまうことで、受講者

が自ら学ぼうという姿勢を削いでしまうことを知っているからです。

では、上手な講師はどんな教材の使い方をしているかといえば、彼らはテキストの本文を読み下したり、解説を加えることは最小限にして、テキストに載っている図や表を最大限に活用しようとします。

通常、テキストや教材には本文を補足する図表や写真、イラストなどが掲載されていることが多いと思います。上手な講師は、これらの図表から「読み取れることは何か」を受講者に抽出させ、比較させたり、根拠を探させたり、仮説を導き出したりしながら、それを本文に書かれてある要点につなげていきます。また、写真やイラストが、機材の実物を示したものなどであるならば、講師はその構造について説明するだけでなく、なぜその構造になっているのかという理由と併せて考えさせようと腐心します。

ほかにも、テキスト本文をもとにした作業の「手順」や「システムの全体像」を示した図であれば、それが作業手順であること、パーツとパーツの関連性などを考えさせていくと、体系的な理解が促進されます。この場合は、図の直接的な説明（記載してあるままの説明）ではなく、その図を構成している意味について考えさせていくとよいでしょう。

このように一見、教材のおまけのように感じる図表や写真・イラストも、使い方によっては本文を解説する以上に効果的な場合があります。教え方の上手な講師は、「教材を教える」以上に「教材で教える」ということを大切にしているのです。

オンラインならではの教材活用

最近は研修がオンライン化され、従来の集合型とオンラインライブ、収録型講義のオンデマンド配信など多様な受講形態が可能になりました。とくにオンラインライブでの研修が増えており、それにとまって教材の使い方も変化しています。教材がペーパーレス化されたことで、従来のようにペンなどの筆記用具で手元にある紙のテキストに記入する必要もなくなってきました。

一方で、受講者にメモをとってもらう場合は、「ペンで書く」という動作から、「端末に入力する」という動作に変わりつつあり、今後はそれに適応させた教

図表 教材を効果的に活用する視点

- 1 図表・写真の効果的活用
～読み取れることを聞いているか～
- 2 デジタル教材の特性を活かした活用
～読み取れることを聞いているか～

材設計や使い方が求められてきます。

たとえば、従来の教材では、ポイントになる箇所に空欄を作っておき、受講者に記入させることで学習効果を上げる場面がありました。これがペーパーレスになることで、データ化されたテキストに受講者が直接入力することができます。デジタル化によって多角的な活用ができる場面も増えてきました。

また、講師は受講者にキーワードや語句を記入させるだけでなく、従来なら講師が解説していた情報部分を時間を与えて分析させ、その要約や見解をチャットで提出してもらうということもできるようになりました。たとえば、日本の今後30年の人口推移のグラフから読み取れることを受講者にチャットで提出してもらうことで、空欄に語句を入力させる以外にもデジタルシールを活用することができます。これらは、オンラインならではの学習効果の高い教材活用になります。

このように、教材は講師にとって受講者の学びの最大化を図る重要な道具になります。その使い方ひとつで、道具が講師を助ける大きな武器になるのです。

講師として登壇したてのころは、教材内容を受講者に伝達することで精一杯かもしれません。しかし、その伝達内容が受講者の理解や学習にどの程度影響を与えているかという点を客観的に振り返ってみることも大切です。そうすることで、講師から伝えるべきこと、受講者が自ら学習すべきことの棲み分けが明確になり、教材の使い方がよい方向に変わってきます。

「教材を教える」のではなく「教材で教える」というわずかな視点転換が、講義を面白くしていきます。

*

今回は研修を双方向で展開する方法についてお伝えします。